

1. 概要：

- ・初参加の6名を含む総勢15名で「なぜ学校でいじめが起きるのか？」という問いを掲げて、主に、加害者はなぜいじめめるのか、クラスの他の生徒はなぜおかしいと言えないのか、について対話し考えた。

2. 対話：

(0) 問いの提起

- ・過去の「なぜいじめは起きるのか？」での対話をメモで振り返りながら、進行役から、原因を加害者とクラスの視点から考えたいと提起し、「なぜ学校でいじめは起きるのか？」の問いで対話を始めた。

(1) 加害者はなぜいじめめるのか？(加害者の視点)

- ・対話記録では「その他の多数との同質性を確認し最後は安心したい」ことが動機とされている。だが、同質性を確認しただけであれば、異質性を持つ者を攻撃する必要はないが、なぜ攻撃するのか？
- ・過去に米国コロンバイン高校で銃乱射事件が起きた。犯人はいじめ被害者で、いじめ加害者は優等生であった。優等生は勉強ができない生徒を蔑んでいた。他人を蔑むことは楽しいのでそれが動機である。
- ・同質性を確認するだけで満足できる生徒はそこで留まるが、できない生徒は暴走する。
- ・単純に弱い人が困っている状態を見ることが楽しいからである。→弱い人をいじめることが許されないことだが、いつ何によって許されると思ったのか。
- ・対戦ゲームで、自分の方が相手よりも強いときに、相手には分からないように力を温存・加減して接戦に見せるときがある。自分の中では密かに優越感を抱くが、その感情と似ているかもしれない。
- ・他者と向き合うとき必ず互いに異質性を見出すが、それを互いに認め合えれば、いじめにならないが、一方的に力で対処する道がいじめになる。
- ・いじめでは、相手が泣いたら止めることがある。動機は、優越感を得ることである。「他人の不幸は蜜の味」と言われるが、他人が困る様を見ることは楽しいからである。
- ・尊敬されている二人のママ友同士がいる。関係性がギクシャクしていると思ったら、背景には、一方が他方のネガティブキャンペーンを張っていたと後で知った。ネガティブキャンペーンで、自分が正しいということを確認したいのではないか。
- ・いじめめる側にいけば、いじめの首謀者に認められることにより、自分がいじめられることはないという精神的な安定が得られる。
- ・学校でのいじめは、集団が一人をいじめめる。その集団内では、なぜ一緒にいるのかを誰も説明できない。
- ・その集団内での共通項は「いじめられる生徒とは別である」と言うことによって、同質性を確認できる。
- ・異質性とは、多数派からのズレであり、それが根源と思う。
- これまでの話では、蔑む、困る様を見ることによる快感、優越感を得たい(快)という観点、首謀者からか、被害者生徒とは別であると同質性を確認することによる集団内で認められたい(他者による自己確信)という観点が出た。
- ・子供の世界は少々な事をして犯罪にならない。大人の世界は倫理を考え出した。倫理とは突き詰めることと基本的人権。学校でしっかり倫理を教えて生徒に分からせればいじめを減らせるし、その事例もある。いじめをするのは倫理が分かっていないからである。→いじめをいじめと思っていない人もいる。
- ・いじめの動機は、自分の欲を叶えたいことにある。→問題はそれが何の欲かである。→それは集団の中で力を使って相手を従わせたいという欲である。

(2) いじめとは？

- ・誰かに愛されたいと思うときあえていじめに近い行動をする。→それは意地悪だが、いじめと同じか。
- ・就職面接で昭和の中年男性面接官が女性候補者に「結婚したら会社を辞めるか」のような難しい質問を出すことがあるが、いじめと同じではないか？→ハラスメントの一種だが、いじめと同じか。
- ・異質性と向き合うときに、いじめが起こるが、からかいも同様に異質性に向き合ったときの反応である。
- ・他者と向き合うとき必ず互いに異質性を見出すが、それを互いに認め合えれば、いじめにならないが、一方が力で対処しようとするといじめになる。
- ・ネガティブキャンペーンをしたママ友同士の例だが、愚痴も言っただけでいじめではないのか。愚痴を言える人がいることは大事なことはないか。いやいや、または、少ないと犯罪に走ってしまうことがある。

(3) なぜ「おかしい！」と言えないのか？(クラスの視点)

- ・この問いの設定に違和感がある。むしろ「おかしい！」という声を上げることができる条件は、何かを考えた方がよいのではないか。→意図は同じなので、その問いでも良い。
- ・集団の同質性を保つために他の別の集団を敵と見做すことをする。よく政治家が使う手法である。
- ・(おかしい！という声を上げられないのは)少数側になりたくないからである。
- ・いじめられる子は忘れない。いじめられる生徒はすぐに忘れるが、怖くて声を上げられない。
- ・怖いから言えない。自分の娘は、クラスにある幾つかの集団には属さずにいるが、いじめられる生徒を守ったことがある。→他の集団の生徒では止められないのか。例えば、4名の集団がいじめをしていて、いじめの被害者1名を除く他の25名全員が仲の良い一つの集団であれば、止められるのではないか。
- ・学校のクラスでは、何もそこまで仲が良くはなく、集団意識がない。私達大人も、電車の中で見知らぬ二人が喧嘩になりそうに揉めていてもあえて仲裁には入らない。例えるなら、クラスの中の生徒達は、電車に偶々乗り合わせた程度の間柄でバラバラな関係性であり、だからいじめに関わり合いたくない。
- ・例えば、体が臭い生徒が4名の集団にいじめられているケースでは、他の25名の集団は、もし助けたらその体が臭い生徒と仲良くなるといけませんが、そうしたくないから助けたくないのではないか。
- 自分の娘がいじめられた生徒を助けた例では、娘はそのいじめられた生徒と仲良くなった訳ではない。だから、いじめ被害者と仲良くなりたくないからではない。

(4) ナチスによるユダヤ人迫害へ敷衍してみると？

- ・いじめは、ナチスによる人種迫害に構造が似ている。ナチスがユダヤ人を迫害したときも、「ユダヤ人は裕福である」という認識があり、迫害で正義を示せるという考えがあった。いじめを止める人が必要だが、ナチスによるユダヤ人迫害のケースでは、(止めるどころか)ドイツ国民はむしろナチスを称賛した。
- ナチスによるユダヤ人迫害では、ナチスに加担した親衛隊の構成員は「命令に従っただけ」と弁明しており、怖くてナチスに異を唱えることができなかった。ドイツ国民は、先の例と同じでバラバラの関係性しかない個々人の集まりであったためにナチスに異を唱えることができなかった。

3. まとめ

- ・対話ではいじめの動機として優越感等の快の感情と他者による自己存在承認の観点が出たが、それらは同じものか。また、対話で語られたように生徒同士がバラバラな関係性であることは友達との存在とどのように関係するか。提題者としては問いが尽きないが、ここからはそれぞれによる再考に委ねたい。